

アンティリウス



イエルムの唯一まことの後継者

アンティリウスはイエルムの光であり、その純粹で汚れなきところから生まれた。反逆の神々の手による父の「死」の後、彼はその座を継いだ。人々がイエルムの法から逸れた後、彼は黄金の丘で「死」を迎えたが、しかし帰還を果たし、再び統治して、最初の日の出に向けて世界を整えたのである。

な転換が起こった。軍が彼らを支配する道具となるなかで、庶民はそのカルトが彼らに加えた暴政ゆえにアンティリウスを拒んだ。いまやカルトを構成し能動的に礼拝と入信を行うのは、主として戦士貴族と皇帝である。それにもかかわらず、彼はダラ・ハッパの法に従うすべての者から敬われており、帝国の天上的かつ政治的な秩序を維持するうえで要となる役割を担っている。

異界の故地

アンティリウスは「黄金の丘」にあり、ダラ・ハッパ皇帝とよく似た装いをまとっている。ここから、その信者たちは文明の存続を確かなものとするため、「小暗黒」および「大暗黒」へと赴くことができる。

死後の生

信者たちは、再び大地へ帰る時が来るまで、天空においてアンティリウスの意志を執り行う十柱の天使に加わると信じている。信者はアンティリウスの掟に従って火葬される――これは彼らの神の父たる天界の「火」との再会となるのである。

圖象

アンティリウスは常にイェルムそのものの像のうちに
見いだされる。彼はエゼルヴェズタイから発する光であ
り、その父とその宮廷を照らし出す。単独で描かれる場
合、アンティリウスはイェルムによく似た姿で、「輝け
るもの」の帝国の正装をまとっている。彼は「権威の宝
珠」と「太陽の黄金の槍」を手になっている。その威容は
神なる父と調和をなしているが、より武人めいた趣を帯
び、統治の笏ではなく武器を携えている。時として、ア
ンティリウスは「正義の外套」をまとった「太陽円盤」
そのものとしても描かれる。

ルールとの結びつき

アンティリウスの主たるルーンとの関連は「光」と「真実」である。掟・契約・誓約の守り手として「調和」がアンティリウスと結びつけられることもあるが、関連ルーンと呼べるほどではない。「静止」もまたアンティリウスの図像に見いだされるルーンである。なぜなら彼はイェルムの不変にして尽きることなき光だからである。

カルトの生態

存続しつづけている理由

ダラ・ハッパの伝統主義的世界観においては、イエルムが帰還した今、アンティリウスのカルトは宇宙が正しく機能するために不可欠である。彼はイエルムより出でし者であるが、イエルムと同じではない。人と神とのあいだの仲介者の地位を占め、神なる父の再生と死を模しながら、アンティリウスはより広き太陽神殿の従属的な（しかしなお独立した）一部をなしている。彼はダラ・ハッパが大暗黒を生き延びるうえで決定的な役割を果たし、世界におけるイエルムの代理者として再び確立されたのである。

ペローリアの諸民族のあいだで最も広く信奉される戦の神々がシャーガシュとヤーナファル・ターニルスである一方、アンティリウスはダラ・ハッパの精鋭戦士（皇帝直属の親衛兵とその私的な部隊）の守護たる戦神である。それは彼らの生活に訓練と兄弟の絆と秩序をもたらす。ダラ・ハッパ帝国の掟と秩序の創造主として、歴代のすべての皇帝は、正義を追求し、定命界においてイエラムの大司祭としてその代わりに振る舞う能力をアンティリウスに負っている。最も卑しき農民でさえ、自らを守る法の造り手としてアンティリウスを敬うのである。

社会的・政治的な力と地位

アンティリウスのカルトは名目上ペローリアで最も強力なカルトの一つであってしかるべき地位にある。ダラ・ハッパ皇帝はイェルムのカルトと並んでこのカルトの大司祭でもある。しかしながら、イェルムのカルトから独立して行動するアンティリウスのカルトの力はきわめて限られている。アンティリウスのカルトは皇帝の布告と掟を執行し、その意志が確実に実行されるよう働く。第三期の初頭以来、帝国軍のカルトとしての性格に重きを置くようになったため、彼はダラ・ハッパの諸部隊によって広く礼拝されている。軍と行政機構のすべての官吏および将校はカルトの平信者でなければならない。

特別な好悪

アンティリウスは、信者たちが彼自身とその寺院に献身を示し、名誉をもって振る舞い、ダラ・ハッパ皇帝に



The Metropolitan Museum of Art,
<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/324924>

技能

カルトは平信者に対し、〈視力〉、〈チャリオット操縦〉、〈ロングスピア〉、〈弓〉の訓練を提供する。

精靈魔術

カルトは平信者に対し、《遠視》、《機敏》、《修復》、《光》を教える。

入信者

入信条件

入信者は、次の条件のうち少なくとも一つを満たさなければならない。すなわちダラ・ハッパの王家に属すること、ダラ・ハッパ皇帝の子孫であること、このカルトに属していた父親を持つこと、あるいはダラ・ハッパ軍に仕えていることである。かつてこのカルトへの入信はもっと開かれたものだったが、第二期以降著しく厳格化された。入信者は暗黒のカルトに属してはならず、ペント人であってもならず、混沌の存在であってもならない。伝統的に女性はこのカルトに入ることを許されていないが、貴族の女性が入信した先例は存在する。

義務と制限

アンティリウスの入信者は通常と同じくその全収入の十分の一をカルトに寄進し、加えてその時間の十分の一を捧げることが求められる。カルトの聖日は遵守されねばならず、礼拝の儀式的あいだにマジックポイントを2点捧げねばならない。入信者は精霊魔術の《火剣》、《暗闇の壁》、《棍棒》、《火の矢》を習得することができず、もし習得している場合は忘却しなければならない。

恩惠

入信者は寺院からカルトの技能を半額で習得することができる。入信者は入信者の段階で加護を一つ受け、それに伴う数の制約を負うことができる。光の僕、光の司祭、あるいは光の息子の地位に達するまでは、それ以上の制約を負うことはできない。

